
カジノ・ポリス！！～眠らない街の眠らない物語～

百鬼夜光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カジノ・ポリス！〜眠らない街の眠らない物語〜

【Nコード】

N9128I

【作者名】

百鬼夜光

【あらすじ】

娯楽と犯罪が行き交う街、ラスベガス。常時灯りがついているそこは、まさに眠らない街と言っても過言ではないだろう。

そんな所へと強制的に長期出張させられたのは、バカ刑事コンビ。

『赤石和希』（あかいしかずき）と『黒谷昭彦』（くろたにあきひこ）だった。

東京の都庁からベガスへと飛ばされたこの2人。

現地に着き、双方とも遊ぶ気満々で肩を鳴らすのだが、無線から流

・ 来てきた音声によって、2人とも現実へと引き戻されるのであった。
・

FILE 1：お嬢さんを守れ・1

「さうて、石和！！ベガスといえは？」

「カジノ！！」

「いくか！！」

「おう！！」

なんとも面倒くさい特務を受けた昭彦と和希。

さらに、ラスベガス市警が今回の出張について何も聞かされておらず、

全員が全員で『Why?』と首を傾げてきたため、2人揃って野宿が決定したところだった。

…のにも関わらず、その気分はまんざらでもなかった。なぜなら、ギャンブルに手を出してみたいと思っていたのだ。

見た目はメタボで、眼鏡をかけた小太り署長から、『仕事の時以外は好き勝手動いてくれて構わない』と言われている手前、遊ばない理由はない。と、いうわけで早速動き出したのであるが……

(…ヨ！！…ヨ！！)

「…？ 昭彦。今何か聞こえなかったか？」

「そつえば、聞こえたような聞こえなかったような」

(シ…ダヨ！！シ…ダヨ！！)

「無線じゃないのか？」

「さすが石和。頭いい」

「はっはっは。まあな」

「調子のんな」

「！？」

「これか」

「今お前別人に変わらなかったか！？」

「それより……」

「ん？」

(シレイダヨ!!シレイダヨ!!)

「.....」

舞い降りる沈黙。

そして数秒後、昭彦が無線を切って満面の笑みを見せた。

「俺たちは、何も聞いてない」

「今、指令つて.....」

「な・に・も・き・い・て・な・い」

「.....まあ、いいか」

今度こそ遊べると確信した矢先、昭彦の携帯が震えた。

「誰だよ」

昭彦が仕方なく「はい」と電話に出ると、その向こうから聞いたこととの

ある平凡な声が聞こえた。

『ほう、出張初日から上司の無線を堂々と切るとはな』

「げっ!!その声は署長!!」

『次回の給与査定、楽しみにしているがいい』

「帰りを楽しみにしている。その『上から目線』を『下からすみません』に

変えてやる」

『いや、その口の聞き方やめようぜ』

「で?用件は?」

『社長の娘を預かってほしい』

「やだね」

『うん。即答はやめような。そしてそのデカイ態度も』

「それを言うなら、あんたのデカイ腹も何とかしてくれ」

『やかましいわ!!これでもビーズブートキャンプやってんだぞ!!』

「いや、ビーズブートキャンプの意味無えよ。っつーかむしろお前、

ビーズブートキャンプよりもデブーズブートジャンプの方が良

くね？」

『やだよ！！なんだよそれ！！』

「その名のとおり、デブ達がブタと一緒にジャンプするんだよ。ちなみに

BGMは『ハゲの歌』」

『何そのとてつもなくシュールな風景！！』

「そうか？見てみると結構楽しいぞ？」

『俺には芋 坂係長しか目に浮かばないんだが！！』

「まあそれはそれとして。何だつて？娘を殺ってほしい？」

『そんなこと一言も言つて無えよ！！預かってほしいんだよ！！』

「俺たちをいきなり出張させたやつと言つ事を聞けと」

『うー！！』

「『手続きは出来てる』とか言つてたのに、何もしてなかったやつと言つ事を聞けと」

『ううー！！』

「そのせいで今夜野宿決定で、ただでさえイライラしてんのに社長の娘を

預かかって、どうかと思うねボカア！！」

『うぐうぐうぐうぐうー！！』

「とにかく！！いやなもんはいや！！」

『報酬は弾む』

昭彦は一瞬固まり、和希に見えない所まで移動した。

『いくらだ？』

『あ、金？』

「つたりめーよ。で、いくらだ？」

『とりあえず・・・でどうだ』

「署長。あんた、相当貯めこんでるな」

『まあな。では、よろしく頼む』

「お任せください。命に代えましてもお嬢様をお守りいたします」

『頼もしい限りだ』

昭彦は、電話なのにも関わらず、深々と頭を下げ、署長からの電話を切った。

「どうなった？」

「預かる」

「マジで？」

「マジで。石和、カジノは後回し。行き先変更だ」

「はあ・・・で？どこへ？」

「トイ ラスラスベガス店」

「80%くらいお前が行きたいだけだろ！！」

「いや違う。90%だ」

「余計悪いわ！！」

「とにかく行くぞ。小娘にあったTOYを探さないと」

「なぜに英語？」

こうして、トザラスへ向かった昭彦と和希。

そこで適当なおもちやを買い集め、いやがる昭彦を無理矢理引きずって

店を出たのであったが、署長からのメールで、集合場所は『カジノ』との事だった。

「カジノって、漠然としてるなあ。どうやって見つけるん・・・」

「これじゃね？」

昭彦と和希の目の前には、カジノがあった。

「いや、ちがうだろ」

「カジノじゃん」

「まあな。でも……」

「さすがに俺もビックリだ。まさか、カジノっていう店名のカジノがあるとはな」

「認めたくないものだな」

「若さ故の？」

「過ちというものは…じゃなくて、とにかく入るぞ」

重い扉を押し開けると、まるで祭りのような喧騒が鼓膜を突き刺し

た。

「ここがカジノか」

「ゲーセンよりもうるさいな」

「で、署長は？」

「確か、受付の人に『署長だぴよ〜ん』って言うと、案内されるとか」

「そうか、じゃあ……」

しばらくその場で仁王立ちになり、黙り込む昭彦と和希。
数十秒後……

「『じゃんけんポン！』」

勝負は一瞬。2人とも『グチヨパ』とかいうわけのわからん形を突き出し、引き分けとなった。

「仕方ない、2人で行こう」

「ああ」

堂々と受付嬢を呼び出し、高らかにハモった。

「『署長だぴよ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ん！！！！！！！！』」

「『！！』」

『……………』

ダーツやルーレットなどが並び、何百もの人が一言もしゃべっていないこの空間。

いったい、ここはどこなのだろうか。

FILE 1：お嬢さんを守れ・1（後書き）

初めまして。百鬼夜光です。

小説を書くのは初めてなのですが、うまく書けるようにがんばります。

あと、もしよろしければ、感想などをお聞かせ頂ければ幸いです。よろしく願います。

FILE 2：お嬢さんを守れ・2

「こちらへどうぞ」

案内されるまま、怪しげな扉の前に立った2人。

「中で待っている」との事なので、昭彦と和希は扉を開けたのだが、扉の中は、色々なゲームが用意されていただけで、署長の姿はない。

「いない…まあいいか。とりあえずここにあるもので暇をつぶそう」

「賛成。机の上にチェスがあるからやろうぜ」

「俺はこっちがいいな」

「麻雀か…昭彦、お前どこ行ってもそれだな」

「まあな。じゃあ、チェス飽きたらこっちな」

「了解」

いそいそとチェスの準備をする2人の後ろから、太い影が迫ってきた。

言わずもがな、署長である。

「いや、悪い悪い。遅くなった」

「……………」

「露骨に嫌な顔するなよ！！結構傷つくんだぞ！！」

「傷つけばいい」

「そしてそのまま死ねばいい」

「何でだよ！！まだまだしぶとく生きるよ！！」

「まあ、どうでもいい事は置いといて…」

「新事実発覚！！俺の命はどうでもいい事だった！！」

「なんでこのカジノは日本語が通じるんだ？」

「もちろん、俺の血と汗の…」

署長を睨む和希。

「すいませんただの日本人が多いカジノです」

土下座する署長。どうやらこの男にはプライドというものが無いらしい。

「そういえば、まだどこの会社の社長だか聞いてなかったな」
「知りたいか？」

「ああ。その方が仕事しやすいからな」
「そうか。じゃあ教えてやるう」

署長は真剣な顔つきになり、只者ではない空気に2人共黙り込む。
数秒後、その事実は告げられた。

「田中ガラス商会」

「はあああああああああああああああああああああああああああああああ
！？」

「さあ、そろそろ娘さんが到着する頃だ。2人共、頼んだぞ」

「できるか！！田中ガラス商会なんて聞いたこともねえよ！！どこのローカル会社だよ！！」

「っつーか何！？その『タバコ屋の角を曲がって三件目』みたいな感じの名前！！」

「そもそも田中さんとお前はどんな関係にあるんだよ！！」

「田中さんは、俺の古い友人……」

「……」

「……と顔が似ているだけで、全く無関係な赤の他人だ」

「このやるおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
！！！！」

「お前らアレか！？まさか、世界に名だたる大企業とか思っていたのか！？」

「いや、そんな事はないが、まさかガラスの……」

「お、来たぞ」

窓の下。パツと見て15m程はあるリムジンが停まっていた。
と、いうことは。

「しつれいします」

幼稚園か小学校低学年かぐらいの声か部屋に響いた。

礼儀正しく何度も礼をしてから、昭彦達の元へ移動する。

「こんにちは。これからしばらくお世話になります、姫菜ヒメナといひます。よろしくおねがひします」

幼い声に硬直する三人。だが、それぞれの感情は皆一致していた。

驚きとも絶望とも違ひ、その感情とは…

「…か、かわいい…」

『萌え』である。

「…ハッ！！いやいやいやいやいや！！違ひ！！これは任務だ！！」

「そ、そつだ！！署長である私が忘れるところだつた」

「時々思ひ出したように一人称変えるのやめろよ」

「今はそんなこと関係ない。任務の話だ」

「お前に注意されると妙に腹立たしいな」

「今はそんなこと関係ない。任務の話だ」

「く…」

昭彦は同じ事しか言わない署長に殺意を覚えながらも、姫菜を細い目で見ると。

「というか、大体小娘一人ぐらい放つて置いても…」

「おにいちゃんあそんでー！！」

「いいわけないよな。おいで。お兄ちゃんがいつぱい遊んであげよう」

「…ロリコン」

「何を言うか！！お前だつて『おにいちゃん』って呼ばれたいんだろ？」

「ばかええ！！そんな訳…」

「そつちのおにいちゃんも、あそんでくれるのー？」

「あつたわ」

「フン。私になつかない娘など…」

気に食わない様子で部屋を後にした署長。

「さつて、何して遊ぼうか？」

「んーと…」

可愛らしく人差し指を口に当てて考える少女を見て昭彦と和希は、ニヤニヤしていた。

「かわいいな」

「そうだな。このまま日本に連れ帰るか？」

「拉致だろ…でも、それもいいな」

「だろ？」

「でも、そうになると資金が必要だな」

「ちょうどさつき警備が薄い銀行を見つけたんだ」

「ナイス石和。後は逃走経路だが…」

「普通の国道よりも空飛んだ方が良くね？」

「なるほど。つまり飛行機をジャックしろと。そういうことか」

「そうだな。後は、国に帰ってから…」

「パリーン！！」

「！！！！」

穏やかな不陰気を壊し突然ガラスを割って入ってきたのは、1人の兵士。

防護服に身を包み、マシンガンを装備している彼は、無言で作業を開始する。

「きゃあああああああ！！」

姫菜は体の抱えられ、必死に抵抗した。だが大人の力に勝てるわけもなく、兵士が窓のレールに足をかけたその時だった。

2発の弾丸がその頭蓋すがいを貫いた。昭彦と和希である。

その場に倒れ込み動かない兵士を見ると、一撃（正しくは2発）で死んだらしい。

「行くぞ。石和、姫菜」

「了解！！さ、急いで！！」

「うん！！」

階段を駆け下りる3人。だが行く手には数え切れない数の兵隊が押し寄せていた。

「くそっ!!どうする!?!」

「決まってるだろ」

「なるほど」

言うが早いか、瞬間的に2人の表情が変わった。

その眼はまるで破滅を象徴するような赤黒い色に染まり、体全体から殺気を漂わせている。

「姫菜。下がってる」

「え...?」

「大丈夫。俺達の後ろには返り血一滴たりとも飛ばさねえ」

「わかった。おにいちゃんたちががんばって!!」

「おう!!...つと昭彦。これさつき部屋に落ちてた」

渡されたのは鋭い刃を持つ侍の必需品、日本刀である。

「お前には、そっちの方が性に合っているだろ?」

「さすが石和。分かっているじゃないか」

「そんじゃ、いつちよやりますか」

2人は、群がる敵の最中に走り込んで行った。

FILE 2：お嬢さんを守れ・2（後書き）

更新遅れてすいません。書置きが出来ないもので……。本当にすいません。

さて、第2話です。やっとそれっぽくなってきました。

今回はちよっぴりシリアスを入れてみようと思います。がんばります。

言葉の使い方が間違えているところがある場合があります。ご了承ください。

FILE3: Back to the Japan (前書き)

ここから昭彦目線で話が進みます。ご了承ください。

「うおおおおおおおおおお!!」

俺と石和が敵軍に突っ込んでいく。俺はあいつに渡された刀を使っているのだが、実はこの刀使っていると妙な事しか起こらないのだ。切る度に呻き声らしきものが聞こえるし、切り口から青い炎が出るし。一体何なんだ？

「っと」

色々考えているうちに無数の弾丸が飛び交ってきた。扉を盾にして防いだが、そろそろ壊れそう。弾の雨が一瞬止んだ隙を狙い、俺は飛び出した。弾切れらしく、ナイフで襲ってくる兵士たち。

「構えがなっていない」

そう呟くと俺は刀を鞘に収め、居合切りの姿勢をとる。

「刃物はこっやって扱うんだよ!!」

一瞬で十数人の兵士を片付ける。なんとなく倒れた兵士を見てみると、その顔には見覚えがあった。

「石和!!」

「どうした!!」

拳銃を構えながら返事をする石和。忙しいだろうが、これは伝えなくてはならない。

なぜなら、とっつっても厄介な事になったからだ。

「こいつら、あの組織のやつらだ!!」

「なんだって!？」

「胸に付いてるバッジがその証拠だ!!」

「本当だ!!でも何でやつらが関わってるんだ!？」

「知らん!!とにかく生け捕りにしろ!!いいか、決して殺すんじゃないぞ!!」

「了解!!」

そう言うと石和は銀色の二丁拳銃を敵の親玉らしき人物に投げつけ

ると、サバイバルナイフで兵士たちの喉を掻つ切っていった。
数分後、敵の全滅を確認した後姫菜を迎えに行くと彼女は泣いてい
た。

「ど、どうした？」

「怪我したのか？」

「……（ふるふる）」

「怖かったのか？」

「……（こくり）」

「なるほど」

「どうする？署長はもう日本に帰ったし、今更『大変です』なんて
言ったら赤っ恥だぜ？」

「わかつている。とりあえず、今優先すべきは姫菜をどこかへ連れ
て行って落ち着かせることだ」

「そだな。じゃあ、ホテルでも行くか？」

「金ないだろ」

「ここに腐るほどあるじゃないか」

言って石和は倒れている兵士の山を指差す。

俺は無言で兵士の懐ふところから金を巻き上げ、石和に向かって呟く。

「お前まへって結構酷い奴だよな」

「躊躇ちゅうちゆもなくやり遂げるお前もな」

2人、3人、4人と次々に回って行き、全員の財布を寂しくしてか
らその金額の大きさに驚愕した。

「一生遊んでいけるんじゃないのか」

「さあな。ところで、さっきから全く泣き止まないこの娘はどうす
るんだ？」

「忘れてた」

「お前……」

と、いうわけで泣き続ける姫菜を連れてホテルの一室に落ち着いた

俺達なのだが。

「やっと泣き止んだか」

「ごめんなさい。心配かけて」

「いや別にいいんだが」

「……」

「ど、どうしました？」

「姫菜、お前何か隠しているだろう」

「うーそ、そんなこと……」

「何もしないから話せ。何を隠している」

「……」

しばらく黙っていた姫菜は、申し訳なさそうに口を開いた。

「実は私のお父さん、変な薬を造ったりしている『海蛇組』^{うみへびぐみ} ってい

う会社の人なの」

「海蛇組……あのバッジは間違いない」

「ああ。例の作戦のターゲットであり、現在指名手配中の極悪非道な輩」

例の作戦というのを説明しよう。今から5年前、俺達が刑事になった直後に参加した作戦のことだ。

その名も『海蛇組残党殲滅作戦』。

当時警察側がかなりがんばって、2万人以上と言われていた海蛇組メンバーを50人にまで減らし、更にその全員がたてこもっている廃工場の一箇所しかない出口を完全に封鎖した。警察はもちろん、中継映像を見ている国民も、その映像を撮っているカメラクルーも勝利を確信した。そして数分後、警察の中の誰かが爆弾を大量に投げ込んだ。

一箇所に集結している警察の中心へ。

出口へ張り込んでいた警察はほぼ全員死亡。死にはしなかった人も全身に火傷や骨折を負った。そのうえ爆弾には毒素の強い粉が大量

に仕込まれていたらしく、後遺症を負った人もいた。

その中で奇跡的に無傷だったのが俺と石和だ。2人だけどこも異常がなく後遺症も無かった。なぜかは俺たちも分からない。

「そしてその後裏切り者が検出され、そいつにも逃げられた」

今のは俺のモノローグだったハズなのだが、なぜか聞こえていた石和が俺を睨みながら続ける。

「残党は消え、裏切り者も消え、日本警察に残されたものは敗北感のみだった」

「で、その海蛇組のメンバーに居たっていうことはもう捕まっている…って可能性も」

「それは、無いと思うよ?」

「どうして?」

「だって、私がおにーちゃんちに預けられる前にお父さんと署長さんが話していたから」

「…!?!」

緊張が走る。組織の奴と署長が関連している!? そんなバカな!!

「どんな話をしていたの?」

「とぎれとぎれだけど、『都庁』とか『例のもの』とか。あと、ない…ない…」

「『内密』?」

「そう! それ! よくわかったね!」

「もしかして、『後遺症』とか『5年前』とか言っていたりした?」

「うん! そー言えば! 何で分かったの? ってゆーかそれがどうしたの?」

「昭彦!?!」

「ああ。ちーとばかりヤバいかもしれないな」

「姫菜。他には無いか?」

「うーん、あ! 爆弾がどこのここのって言ってた気がする!?!」

「石和、姫菜を連れて帰るぞ」

「なんで?」

「察してるだろう」

「まあな」

「行くぞ」

俺は、石和と姫菜を連れて日本行きの飛行機に飛び乗った。

FILE3: Back to the Japan (後書き)

どうも。百鬼夜光です。

突然ですが、あとちよっとでこの作品、終わりを告げます。

連載じゃなくて短編にすればよかったですね…ごめんなさい。

でも、すぐに次の作品を投稿する予定です。

よろしければそちらのほうもよろしくお願いします。

今度は長く続くようにならばります。

「気持ちわかる。あいつは良き上司でもあったし、良き理解者でもあった」

「でも、今回の事件に関連している」

「そういうことだ」

「じゃあ、なぜ裏切り者のやつが俺たちに姫菜の護衛をさせたんだ？」

「わからない。どうせなら姫菜をほっといて俺たちごと爆破に巻き込んでしまった方があいつら的にはよかったはずなのに」

「親父の会社も気になったな。なぜあんな嘘を？」

「何か都合が悪かったんだらう」

「ふーん」

話している間に、都庁到着。

いつの間にか消えていたパトカーの大群。妙な静けさに不信感を抱きながらも、

恐る恐る入り口に近づく俺たち。なぜか起きていた姫菜はデカイバケツに放り込んでおいた。

「軽い犯罪」

「黙れ」

さて、中に入るや否や俺たちを迎えたのは、無数の弾丸だった。

「「のわあああああああああああああ！？」」

のらりくらりと避けて走るが、石和が無駄なことを語りかけてきた。「何で走ったんだよ」

「あの場で走り出してなければいつ走り出したんだよ！」

「ん〜、二十秒後？」

「死ぬわ！！完全に蜂の巣だわ！！」

「とか言ってる間に階段がホラ」

「とりあえずここに隠れよう」

階段の下に隠れて数十秒、幾人もの兵士が駆け抜けていった。

マガジンを拳銃に装填して一息つくつと、またも横にいるやつが「なあ」と口を開く。

「これからの戦闘どうする？」

「俺にはこの刀がある」

俺は腰に挿した刀を鞘こしらごと前に突き出す。

と、急に感覚が無くなった。

そりゃそーだ。消えたんだもんな。あっはっはっは。

……へ？

「「ぎゃあああああああああああ！……！」」

「どうするよ！？消えちゃったぞ！？」

「わかってるけど……とりあえず屋上へ行こう」

「ええ！？なんで！？」

「こういうビルの事件の犯人は……屋上に行くとな相場が決まっている」

「マジで！？」

「とにかく行くぞ！屋上！」

かんかんリズム良く階段を上っていくが、急に石和が足を止める。

「なあ」

「なんだよ」

「あれ、なに？」

指差されたそこを見ると怪しげな装置がひとつポツンと置いてあった。

「なんだろうな」

常人ならここで『とりあえず持つておこう』となるだろうが、残念ながら俺たちは

バカだった。

「とりあえず撃つか」

「だな」

パンン！！とありえない音がして壊れる装置。するとどこからか見覚えのある体が出てきた。

『おお、君たちか』

「…署長」

『ん？なんだその目は』

『あんた、屋上にいるんじゃない？』

『これはホログラム映像だ。でもよくわかったな。なぜ？』

『大体犯人は屋上に居いる』

『なにその発想』

『いいんだよ。で、俺たちに何か用か？』

『君らが壊した今の機械は、一般人を海蛇組のメンバーにするための洗脳装置なの』

「…はあ？」

『とにかく、詳しいことは上で話す。さっさと屋上に来い』
「がちゃん。つー、つー。」

さて読者に聞こう。今の俺の感情は何だと思う。幻滅？いや違う。怒り？いや違う。

殺意だ。

「石和」

「なんだ」

「あのクソ署長、殴りにいこうぜ」

「ああ。できればそのまま再起不能にしよう」

「覚悟は？」

「十二分」

俺たちは屋上へ走る！

…が、まだ知らなかった。この先に待つのは最高にどーでもいい展開だけということ。

FILE 4：貴重な都庁は署長が丁重に扱っている（後書き）

はい、第4話です。テスト期間中にも関わらずこのペースで投稿できるのは

まさに奇跡です。多分次は遅くなりますけど、その分ギャグを入れてがんばります！よろしくです！

R A S T F I L E : 最後まで警察関係無かったね

屋上上がった俺達を迎えたのは、泣きそうな顔になっている姫菜とそれを人質にとっているアホ2人組みだった。そのうちの一人、姫菜の親父と思われる男が「やっと来たか」と口を開く。

「待ち兼ねていたよ」

「待たなくても良かった。それとなぜ姫菜がそこにいる」

「それについては私わたくしが」

「署長店長！」

ご紹介に預かりやがったこいつはご存知メタボなアホ署長である。

…署長だか店長だかはつきりしろよ。加藤清〇郎君に謝れ。

「実は、つい五分ほど前に私はここへ来たのだよ」

「で？それだけでは姫菜がここに居る理由にならないぞ」

「わかつている。姫菜はついさつきこいつがそこで拾った」

「姫菜あああ！動くなつて言つたらるおおお！！」

「ごめんなさいiiiiiiii！！お父さんに誘われてええええええ

！！！」

「くそ…で？さっきの怪しげな機械はなんだつたんだ？」

「だから、あれは洗脳装置だつて。罪の無い人を海蛇組に引き入れ

るための」

「お前今、とてつもない悪行をさらつと言いつ流したよな」

「とにかく、その装置が壊されたんだ。どつかのバカ2人に」

「罪悪感の欠片も感じないんだが」

「まあ、壊されたところで都庁爆破は決行するけどね」

「さすががしいほど悪人顔になつてるぞ」

「さて、そろそろ爆弾の解説をしようじゃないか」

「そんなことしていいのか？すぐに解体するぜ？」

「大丈夫。この爆弾、各階に1つずつ仕掛けてあるから」

「とてつもなく厄介だなおい」

「それでもって、最初の爆発から30秒おきにどこかの階で爆発が起きる。」

爆弾の数は屋上合わせて60個。ちなみに、スタートは決まってい

いが
「ゴールは決まっている。最上階のメインコンピューター室だ」

「場所を知つたらまずそこを解除に行くが…」

「残念ながら鍵が閉まつてる。ちなみに全ての爆弾を解除するためには、ある場所に隠されている爆弾を解除すればよい。そうすればコントロールが失われ、爆発はストップする。ヒントは『地球上』だ」

「規模デカすぎだろ。…死ねばいいのに」

「相変わらず俺の命は軽いのか…まあいい。もうすぐ爆発が始まる。そうなれば」

私達3人は逃げ出させてもらおうとしよう」

「く…せめて姫菜だけでも…」

「ほら、もう始まる。5、4、3、2、1…」

「姫…!!」

「ゼロ」

楽しそうにニヤけた署長を合わせて3人の後ろで見事に爆発が起こる。

「はーっはっはっは…は!?!」

爆風でこっちに飛んでくる3つの体を避けながら再確認した。こいつら、真性のアホだ。

署長は署長でスタート地点を決めておけばよかったし、姫菜の親父に至っては

名前すら出させてもらっていない。役どころがある署長より遙かにどうでもいい存在となってしまうた。何をするか以前の問題だ。せめて爆弾の解説をする前に自己紹介ぐらいしておけばよかったものを。そして3人目の…

3人目…?

「「姫菜!!」」

石和と同時に振り向くが、そこにあつたのは3つの焼死体。ピクリとも動かない。

駆け寄ろうとする俺を制止させた石和は、首を横に振った。

「こいつらに構わず、ヒントの爆弾を探しに行くぞ」

言われなくてもわかつてる。でもやっぱり…

「お前はいいのかよ。姫菜を放つて置いても」

「いいも何も、既に手遅れだろ」

「そっぴやそっぴや」

言われてみれば元々姫菜とは無縁だった。今更奴がどうなつたって構いやしない。

それより早く爆弾を解除しなければ。…俺たちってサイテーだな。

「そっぴや、石和」

「どうした?」

「職員一同は?」

「ここへくる前に全員非難させた。『北海道で署長が呼んでる』って言った簡単に騙されたぞ。今頃は羽田辺りかな」

ひでえ。

「いいんだよ。それよりさっきからどんどん爆発していつてんだが」

「そっぴや。早く行かなければ」

俺達は階段を駆け降りるが、なんせヒントが『地球上』なんだ、分かるはずもない。

とはいっても、石和はある場所に俺を連れて行ったのだった。

（20分後）

「で?何でここに来たん?」

俺達が来たのは食堂。それもいろんな物がいろんな所に散乱している中。

「決まっているだろう。答えが分かつたんだ」

「マジか！？教えるよ石和！！」

「さて考えてみる。地球上は何という？」

どーん。

「いや、そんなのいいから。さつさと教えるよ」

どかーん。

「はいはい。…地球上は普通『大気圏』っていうだろ？大気があるんだから」

「ああ。それがどうかしたのか？」

「わからないのか？…大気圏」

「大気圏？」

どーん。

「たい、きけん」

「はあ？」

「鯛、危険」

「……………あ」

「露骨にどうでもよさげな表情すんのやめろよ」

「どーでもいいんだもん」

「まあいい。と、いうわけで今現在俺達は鯛の目の前にいるんだどかーん。

「…で？俺に何をしろと？」

「爆弾の解体」

「やっぱりか。やるよ、やります」

「そういえば、爆弾って下手にいじると爆発するんだったよな。ちやんと間違えないようにしないと」

「プレッシャーかけんなよ…ん？」

「どうすた？何か見つけたっぺ？」

「何でなまってんだよ…ところで、君の好きな色は何色だ？」

「なにそのガリ○才最終回的な質問。ここはドラマ通りにピンク」

R A S T F I L E : 最後まで警察関係無かったね(後書き)

遅くなりました。パソコンが落ちてしまったもので・・・

その代わりとっては何ですが、最終回と真・最終回を同時

投稿させていただきました。次の作品もがんばりたいと思います。

番外編：二日後

「なあ、石和」

「なんだよ」

「俺達つて、生きてるのかなあ」

「さあな。生きてるんじゃないか？こつやって話してるんだし」

そう言つて下を見る俺達。目下には2つの体。どう考えても生気が失われている。

「あれつてさ、もしかして…」

「おおつと、昭彦君？僕の隣に謎の階段が」

「どこ行きの？都庁か？」

「いや。天を目指している真つ白の長い長い階段だ」

「おい待て。それは…」

「大人の階段のくぼる」

「登るなああああ！！その階段はきつと天国行きだ！！」

「止めるな昭彦！！俺は逝くんのだ！！」

「逝つちやだめえええええええええええ！！」

「じゃあどうしろつてんだよ！！」

「あ」

「何だ？」

「今日の金曜ロードショーはラピュ〇だ」

「そうだった！！おちおち死んでいられない！！」

「帰るぞ石和！！」

「おつ！！」

その頃、昭彦達の下では…

「なあ〜むああ〜みだあ〜ぶ…」

2人の葬式が行われていた。

「いやー、惜しい人を亡くしたもんだよ。しかも2人」

「あいつら、いい奴だったからな」

「でもバカだったよな」

「そんでもってアホだったよな」

「まあ、いてもいなくても同じだったってことだろ」

「そだな」

「それにしても、奴らが死ぬとはな。よりによって事故で」

「都庁全壊の謎はどうでもいいが、その場にいた昭彦と石和は何してたんだろうな」

「さあ」

その時、2つの体に閃光が走った!!

「勝手に殺すなあああああああああああああああああああ

あ!!!!!!」

「なあ〜むああ〜…あああああん!?!」

坊主の数珠すずしが切れる。

「待つてろよおおおお!!ム〇カあああああああああああああ
あ!!!!!!」

どどどど…と走り去っていく2人。会場にいた人たちは皆唾然して
いた。

皆「勝手に…お前ら今まで花に囲まれて寝ていたんだぞ
?」

こうして、カジノもポリスもラスベガスも関係性皆無の物語は幕を
閉じるのであった。

番外編：二日後（後書き）

これが本当の最終話です。

まぎらわしい事してすみません。

今回の作品は初めてにも関わらず、たくさんの方に観覧して頂きました。

本当にありがとうございます。次回作もよろしく願います！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9128i/>

カジノ・ポリス！！～眠らない街の眠らない物語～

2010年10月8日22時48分発行